

幼稚園における動物介在教育にかかわる保育者の意識の変容

永井 理恵子・溝口 綾子

帝京短期大学 こども教育学科

【抄録】

【問題・目的】 帝京めぐみ幼稚園では2006年より15年間にわたって「動物介在教育」を実践してきた。この実践は帝京科学大学教育人間科学部こども学科の動物介在システム研究室と連携しておこなわれている教育活動であり、開始時より一貫して在園児と保護者の興味関心が大きい活動である。本報告は、この保育実践を支える同園の保育者（教諭）の同実践に対する意識の変容を明らかにし、その実践の更なる充実を図るための一資とすることを目的とする。

【方法】 同園に勤務する保育者（教諭）へのアンケート調査および聞き取り調査による。

【結果】 保育者（教諭）は経験回数を重ねることによって動物介在教育に対する積極的な意識が出現することが確認できた。また、保育者（教諭）たちは幼稚園教育の専門職であるものの動物についての専門的知識は極めて少ないため、同実践においては補助に回り子どもたちの動物への恐怖心を取り除く役割を担いつつ援助を中心におこなっていることも確認できた。その一方で経験回数を経た保育者（教諭）ほど、幼稚園教育を専門とし日々子どもたちと接している保育者（教諭）としての動物介在教育に対する提案を有していることが確かめられた。この教育実践に保育者（教諭）ならではの教育方法論的視点や子どもの発達観を加えて実践を構築することが、さらなる動物介在教育の充実を生み出す可能性を秘めていることも明らかとなった。

【考察】 保育者（教諭）から聞き取った意見のなかには、動物についての専門的な知識をもっている学生（帝京科学大学）であっても、幼児期の子どもの発達段階に適した言葉がけや教材準備などに一定の課題が残されているということが複数、確認された。日々、子どもに接している保育者（教諭）が、よき支援者として動物介在教育の実践に関与し、幼稚園教育を専門職とする保育者（教諭）ならではの「子どもの育ち」に関する視点を生かすことによって、子どもにとっては勿論、帝京科学大学の研究チームにとっても、より効果的な実践が期待できるのではないかと考えられる。すなわち両者がともに話し合い、研究しあう必要性を認識したところである。

【キーワード】 動物介在教育, 保育者（教諭）, 幼稚園教育要領, 専門性

I. 問題・目的（はじめに）

帝京めぐみ幼稚園（以下、本園という）では2006年より15年あまりにわたって「動物介在教育」を実践している。この実践は、本園と同系列にある帝京科学大学の教育人間科学部こども学科の動物介在システム研究室と連携しておこなわれている教育活動であり、実際の動物との触れ合い体験を意図的に計画し実践しようとするものである。この活動に関しては溝口綾子によって「幼稚園における動物介在教育の実践—身近な動物とのふれあい体験を通して—」（日本

教材学会発行『教材学研究』第18巻 2007年3月, pp.219～226所収）と題した論文にまとめられている。この論文中において溝口は、2006年度に実施された3回の実践の概要（対象児、参加スタッフ、動物リスト、プログラム内容など）を示したうえで、活動中の様子を8の事例を挙げて紹介し、保護者へのアンケートも併せて、この活動の全体像を描出している。

この論文において溝口は、この活動に関して保護者は概ね肯定的な意見をもっており、命の大切さを学び、命を愛する心を育ててほしいという期待が寄せられていることを述べている

(p.225)。溝口は、動物介在教育は「とりあえず、動物がいれば何とかなる」「そこに動物がいるから成立する」(p.225) というものではなく、a「その介在者が心から子どもによい経験を伝えたいという気持ちを有すること」が大切であるとともに、b「幼児にとっては直接に動物を見たり触れたりすること、その体験の場を友だちや教師と共有すること、そして、触れ合いによって得られる感動を友だちや教師と共感し合うことが必要な経験」(p.226) であるとも述べている。とりわけbに関しては、論文において紹介されている事例1, 6などにも確認されているように、初めて身近に見る動物に恐怖心を抱いて接近できない幼児にとって幼稚園教諭が傍に寄り添い支えることによって初めて、僅かなりともその子どもなりに動物に接近できたことが明らかにされている。本園での2006年度「動物介在教育」において幼稚園教諭は基本的に「適宜、補助に徹する」(p.220) ものとされていたが、この「補助」があることに重要な意味があるのではないだろうか。

筆者(永井)は2018年度より、本園の「動物介在教育」に触れる機会を得、興味関心を抱き、2020年度に実施された実践を2回、参観することができた。この参観をとおして強く感じたことは、この実践において幼稚園教諭は活動を立案・計画・実施する主体ではないけれども、幼稚園教諭の存在によってこの活動が真に子どもの心に届くものになっているのではないかということである。この観点から筆者(永井)は、特に幼稚園教諭が「動物介在教育」に対して抱いている意識を明らかにすることによって、この教育を更に効果的にするための一助としての分析考察を試みたいと考えた。アンケート調査においては幼稚園教諭の経験年数による意識の相違や変化の様子も考察することを試みた。

II. 方法

1. 幼稚園教諭へのアンケートおよびインタビュー調査を実施し、これを分析考察する。
2. 倫理的配慮を実施し、アンケートおよび聞き取り調査においては、結果は本報告書執筆のためだけに使用すること、いずれにおいても無記名で氏名の表記はおこなわないことを事前に伝達したうえで調査を実施した。

III. 結果(調査結果)

1. アンケート調査

幼稚園教諭に対するアンケートは、2021年7月5日に配布し、20日までに回収した。対象となった教諭は13名で、うち7名より回答を得た。アンケートは自由記述を加えている。質問の内容は以下のとおりである。

アンケート調査の内容

1. 帝京めぐみ幼稚園での勤務年数
2. 本園での動物介在教育に参加した回数
3. これまでに使用された記憶のある動物
4. 動物介在教育における教諭の役割(自由記述)
5. 何等かの改善点や問題点についての気づきの有無
6. 上記5について誰かに話したことはあるか
ある場合は話した人は誰か
話したことがない場合は何故か
7. もし立案・運営に関われるとしたら関わりたいか
8. もし関わったら変わると思われる点(自由記述)

以下、結果を報告する。

調査の方法は、聞き取り用紙に五つの視点(4~8)で自由記述での回答を依頼した。対象の教諭の保育経験は1年目から12年目であり、動物介在教育経験年数と並行している。

次ページに、回答の概要を一覧にしたものを掲載する。

自由記述で得られた回答について以下に示す。
☆幼稚園教諭が動物介在教育において果たしている役割については以下のような記述が見られた。

- ・学年によって関わり方は様々です。私は動物が苦手な子がいる場合、手をとりあいながら一緒にふれあっています。また動物に対しての興味や関心が持てるように「フワフワしてあったかいね!」「かわいいね」「ドキドキしたけど、やさしいね!」と子どもと同じ気持ちや共感できるような役割をしています(12年目)
- ・怖がっている子どもの保護者に「今日の動物介在、先生も一緒にさわってくれるなら、がんばってみる!」との声もいただき、続けていくうちに一人でふれあえるようになりました(12年目)

幼稚園教諭の動物介在教育への関わりに関する質問の回答

	1.経験年数	2.参加回数	3.動物の種類	4.教諭の役割	5.気づき	6.方法の検討	7.計画への参加	8.可能性
1	12年目	1年に11回のべ100回程度	犬(大中小型)、ハムスター、モルモット、うさぎ、ねずみ、へび、蚕、フトアゴヒゲトカゲ	教諭が積極的に触れて恐怖心を取り除く	たまにある(話し方が淡々としている)	ある。同僚と。	少し関わってみたい	年長児のみ虫眼鏡や聴診器を使ったが、他の学年も使うとよい
2	12年目	1年に11回	犬(大中小型)、ハムスター、モルモット、うさぎ、ねずみ、へび、蚕、デグー、亀、烏骨鶏	苦手な子と一緒に触れ合う、子どもの気持ちに共感、保護者からの声を受け止める	時々ある(学年によって伝える方がわかりにくい、子どもへの対応)	ある。毎回、学生と反省をメールでやり取りしている	少し関わってみたい。園への希望、触れ合い方、学生のかかわり方を年度始めに伝えている。	学生の子どもへのかかわりかたにアドバイスできるような改善策を見つけない
3	7年目	1年に12回のべ60回程度	犬(中小型)、ハムスター、モルモット、うさぎ、ねずみ、へび、蚕	一緒に触れ合って「触ってみたい」という気持ちを引き出す援助	時々ある(年齢に応じた言葉遣い)、クイズが多い	ない	関わりたくない。知識の多い学生たちに任せると熱心さを評価したい。	
4	6年目		犬(大中方)、ハムスター、モルモット、うさぎ、蚕		よくある(言葉がけが難しい、クイズが年齢に合わない)	ある。同僚と。	どうしてもよい	間近での触れ合いは、子どもたちに喜びを与える

5	5年目	1年に12回のべ50回程度	犬(中型)、ハムスター、モルモット	学生の話に興味を持ち、ように寄り添う、恐怖心を取り除く声掛け、一緒に触れ合う	たまにある(学生の説明がわかりにくい)動物のクイズが長く、難しく飽きる、戸外での場設定の工夫が必要	ある。同僚と。		
6	2年目	1年に10回のべ5回(コロナ禍による)	犬(中型)、ハムスター、モルモット		ほとんどない			
7	1年目	のべ1回(コロナ禍による)	モルモット	動画での経験(実物でなくても動きやクイズを楽しむ)	ほとんどない	ない(話すほどのこともない)	少し関わってみたい(今の子ども好きなことを伝える)	介在教育の経験をしたうえで考えたい

- ・保育者が積極的にさわることで、子ども達への安心感が得られる。「こわいものではないよ」ということを視覚的に示すことができる(12年目)
- ・一緒に動物を触ることで「触ってみたい」という興味を引きだしたり、挑戦しようとする心に援助できる(7年目)
- ・日々動物と関わっている学生さんの話を興味を持って聞くことができるよう側に寄り添ったり、少しでも動物に触れることができるよう恐怖心をとりのぞくような声かけや一緒に

触ったりして関心を高められるようにしている(5年目)

- ・まだ一回しか経験していませんが、一回目がモルモットの動画を見ましたが、動画内の中でモルモットクイズもあり、実物を見ていなくても楽しんでいました(1年目)

☆次に、介在スタッフの学生に対しては、確かな専門知識をもって情熱的に準備し運営してもらっていることを十分に理解しつつも、以下のような希望が出された。

- ・子どもの学年によっては伝え方が分かりにくい時があったり、せっかく子どもがおもしろいことを発見してくれたりした時に「～～してほしい」と思う事があります（12年目）
- ・淡々と話をしている時などあまり子ども達に伝わっていないように感じた。学生さんでも上手な人だと子ども達は真剣に話を聞いたり、耳を傾けたりする姿が見られていたので（1年目）
- ・年齢に応じた言葉でないことがある（むずかしい言葉の時が多い）（6年目）
- ・集中力が持たないが、クイズが多いこともある（6年目）
- ・子どもに動物の触れ合い方を説明する時の言葉掛けが年齢に合っていない時（5年目）
- ・学生さんが用意した動物クイズが年齢に合わずぼかんとする子が多い（5年目）
- ・学生さんの説明の仕方が分かりづらかったり、声が小さく聞こえづらかったりした。短く簡単なことばで説明した方がよく理解したのではないかと思う（5年目）
- ・動物に関してのクイズの内容が長かったり難しかったりして飽きてしまっていた（5年目）
- ・戸外で行った時には設定の場所が日差しが強くまぶしかったため、動物が見えづらかったり、暑さで集中できなかった（5年目）

☆今後への提言としては、以下のような回答が見られた。

- ・園の要望や子どもの触れ合い方、学生の関わり方等、年度始めに動物介在係（の教諭）が科学大学には伝えていきます。動物に関しては保育者は詳しくはないですが、アドバイスが少しでもできるように改善策をみつけていきます（12年目）
- ・年長児は、虫めがねや聴診器を使ってより動物の知識を深めようとする介在教育の時間があったが、他の学年でも取り入れられるのではと思う。触ること以外の方法がもっと充実されると子ども達にとっても実のある介在教育になるのではと思う（12年目）
- ・動物の知識は専門的に勉強している方の方がくわしく、私たちが知らないことも多々子どもに教えてくれます。計画は一生懸命、科学大の方がたててくれていますので、こちらが口を出す必要はないと思っています（6年目）
- ・普段、動物に触れあう機会が少ないと思うの

で、本園の特性としても実際に見て触れて間近で感じるものがあるというのはとても良いことだと思う。どんな動物が来ても子どもたちもとても喜んでいる姿が見られているので、続けていけると良い（5年目）

- ・（もし一考するなら）動物に関してのクイズの内容を年齢別に変化を加える（例えば年少さんならクイズではなく紙芝居にするなど）。間のもたせ方を考える（動物の手あそびをするなど）（5年目）
- ・学生さんなりに色々と考えながら一生懸命子ども達のために考えてくれているので、いい経験ができていますと感じます（5年目）
- ・計画に関われた際、今子どもたちが好きなものの、この園の子たちの好きそうな物を伝えられるのではないかなと思います（1年目）

☆以下、分析をおこなう。

(1)「動物介在教育の意味」については、経験年数6年以上の教諭5名は子どもたちにとって日常生活では体験できない動物との直接的な触れ合い体験の機会となっていると捉えている。具体的には、動物から発せられる“温かい”や“動く”など生の実感や動物への触れ方など、生物から体験的に学んでいると回答している。保育経験5年未満の保育者の中には、自分自身が動物とかかわる経験が少ないため、触れ合い体験に消極的であったが、機会を重ねる中で動物介在の意味を考えるようになり、子どもと同じ位置で共に楽しい経験となるよう努力したと述べている。

(2)「動物触れ合い体験の印象」については、開設当初から大学の動物介在システム研究室のプログラムによって動物の生態を学んでいる学生が介在者となり展開されている。そのため、動物との触れ合いそのものは専門的な知識や扱い方を体得している学生の主導に任せ、本園の教諭は子どもの管理や援助を行うサブ的な立場である。ほとんどの教諭が日常の家庭生活において動物を飼育するという環境になかったという。殊に触れ合い体験に消極的と回答した6年未満の教諭にあってはそれが動物介在の教育方法と単純に捉えている。

(3)「保育者としての援助と子どもの変化」については、動物を苦手としている子ども、その多くが、見慣れない動物、敏捷性のある動物、大きな動物には恐怖心を抱いている。それらを取

り除いて楽しめるよう傍に寄れない場合には手を取りスキンシップを図ったり、子どもの気持ちに共感したり一緒に触れたりするなどすると、次第に「触ってみたい」と自発的な姿が見られるようになった。それは子どもたちの表情が安心感に替わり、態度も落ち着いた様子に変容していったことから明らかである。

(4)「動物触れ合い体験で気付いたこと」については、動物の介在者である学生は、それぞれの動物への専門的な知識の基、子どもへ話しかけたり、触り方のモデルを示したり丁寧な対応ではあるが、幼児期の子どもへは理解の難しい言葉遣いや長い説明の場面もあり、子どもの集中力が保てないことが多々あった。このことについてはほぼ全員の教諭が指摘している。また、動物の種類によっては各クラスを2～3グループに分けて、導入として行う紙芝居、触れ合い体験後にクイズを出す、など教材を用意していることは、日常保育でもする内容を取り入れることで楽しい体験となるようにしたいという工夫であると評価している。しかし、その内容が幼児には難しかったり、長かったり、話し方の間のとりかたが拙かったりと年齢や発達に沿っていないと思われることも述べている。これらについては本園の介在担当教諭が毎回プログラム終了後に、反省点をメールでやりとりして次回に活かせるようにしている。

(5)「動物触れ合い体験で改善すべきこと」については、新学期のプログラム作成は、帝京科学大学の授業を優先した日時の決定や、連れてくる動物の選択は、生態によって種類や数などを全面的に任せている。このことについては動物介在教育の開始時から一任する方向であったが、ほとんどの教諭は、学生の子どもへの話しかけ方や間の取り方など、保育の「技術的な部分」については学習し工夫することが必要であると回答している。さらに、年長児だけ虫眼鏡や聴診器を使った回があったが、他年齢児でも使用できるのではないかという少数意見もあった。

(6)「その他」では、2020年度、2021年度はコロナ禍のため、例年と同様には実践することができなかった。2020年度は、2回ほど感染予防対策（段ボールの囲いの中で一人ずつハムスターに触る、園庭で行うなど）を取りながら行った。2021年度は、帝京科学大学から出向することが禁止されているため、2回の動画配信で実践され

た。多くの教諭は直接に触れる体験ではないものの、子どもたちは動物の形や動きを視覚的に楽しむ様子が見られたと回答している（続く2）において報告する。

2. 聞き取り調査

(1) 2020年度「動物介在教育」担当係の教諭Aによる見解（聞き取りは2021年7月21日）

「動物介在教育」を実践するにあたり、幼稚園では毎年、主催者との連絡をとる担当係が決められる。2020年度に担当係をしていた教諭Aから、その運営の様子についての聞き取りをおこなった。聞き取りは、2021年7月21日（水）、1時間ほど実施した。ちなみに2020～2021年度にかけてはコロナ禍により、2019年度まで実施してきたプログラムの運営が実施できない状態である。

教諭Aは2019年4月、本園に就職した。初年度は1年間、一教諭として「動物介在教育」を経験し、一年後に担当係に任命された。

2019年度までの「動物介在教育」では、年度はじめに一年分の日程が決められて連絡が来る。ペースはおよそ月に一回、年間10回程度である。

やってくる関係者は、主催者の花園誠教授とともに、生命環境学部アニマルサイエンス学科と教育人間科学部こども学科の教員と学生らである。連れてくる動物として教諭Aが記憶しているものは、モルモット、すなねずみ、ハムスター、ウサギ、犬（大型、中型、小型）鳥骨鶏、蚕などがあるそうである。ちなみに本園では、かなり大きく成長したミドリガメ2匹を飼っているが、地域状況や飼育環境の点から、幼稚園などで多く飼われているウサギやニワトリ、インコなどは飼われていない。

活動の内容、連れてくる動物種については、決まったことが伝えられてくる。2020年度はコロナ対応が必要であるため二週間程度前に連絡があり、具体的なところまで運営形態の打合せをしてからの実践となったが、2019年度を思い起こすと前日もしくは当日に実践計画が届くこともあったという。

「動物介在教育」では毎回、研究課題を持っているようであるが、後に研究結果が届けられたことはなく、何を目的とした研究であり、結果がどうであったのかについて聞いたことはなく、また文章にまとめられた報告書や論文を受

け取った記憶も特にないとのことであった。

当日の運営については来訪する学生がおこなっており、その際の活動内容・方法などは直前に送られてきた計画に則って実施されている。とはいえ、計画段階では同じ内容・方法で実践がおこなわれる予定であった活動が、同一学年の別クラスで異なるものになっていることもあったという。

上記のように本園における「動物介在教育」では基本的に主催者側が運営し、幼稚園教諭は役割を与えられることはない。しかし、教諭たちが実際におこなっていることとして教諭Aは、以下のような点を挙げた。第一に、子どものなかには動物に対して恐怖心や苦手意識をもっている子どももいる。そうした場合には幼稚園教諭が傍に寄り添い、共に動物に接近することにより、子どもと動物が身近に接することができる場合があるという。その理由として教諭Aは、やはり子どもと幼稚園教諭のあいだに形成されている「信頼関係」が重要であると答えている。第二に、ときに子どもの状態に応じて活動のサポートに入ることがあるという。こうしたことを踏まえ教諭Aは、本園における「動物介在教育」の実践には、幼稚園教諭の存在は不可欠なものであると考えているという。

こうした認識のもとで教諭Aが感じていることとして、教諭Aから次のような言葉があった。主催者側においても、本園側にとっても時間的制約が厳しいことや、両者の所在地が山梨県と東京都心部という距離があることなど、あらかじめ制約として乗り越えることが難しい条件があることは避けがたい。しかしながら、それらを乗り越えて、計画の段階から話を聞き、事前に打ち合わせをして実践に臨めば、研究者グループ、幼稚園の子ども及び教諭の双方にとって更に有益な実践が成立するのではないか。そのため話し合いの場が設けられることを期待するが、せめて教諭がおこなうサポートについての提案だけでもあれば、幼稚園教諭も一そう積極的に活動に取り組めるとともに、子どもたちにとっても更に実りある有意義な体験になるのではないかと、A教諭は述べていた。

(2) 2021年度「動物介在教育」担当係の教諭Bによる見解（聞き取りは2021年8月20日）

続いて2021年度の担当係の教諭Bからの聞き

取りを紹介する。

2021年度はコロナの変異株の流行により年度始めから実施が不可能となっており、本論文を執筆している8月において今後の見通しが立っていない。こうした状況の中、1学期に2回の動画視聴による動物介在教育が実施された。昨年度は11月に実施したのが最後であったため実質的に半年もの期間が開いたこととなり、幼稚園側から大学に依頼をして動画を送信してもらい、6月29日と7月13日の二回に亘り、夫々学年ごとに分けて動画を視聴した。その模様を「ふれあいだより」に記載して保護者に届けている。ちなみに「ふれあいだより」は、動物介在教育が終わるたびに教諭が作成して保護者に届けている。

この動画は帝京科学大学の学生は卒業研究の一環として作成したもので、おそらく小学生向けに作成されたものであると教諭Bは答えている。動画はクイズ形式で「この動物の食べ物は何でしょう?」といった内容であった。一回目はモルモットとハムスターの動画が届いたが、年少・年中児には時間が長いのでモルモットの部分のみ見せ、年長児にはモルモットに加えてハムスターの動画も見せたとのことである。二回目はウサギの動画が来たが、白くて耳が立った一般的なイメージのウサギのみならず、耳が垂れた種や模様がある個体の動画もあり、子どもたちは興味深く見ていたとのことであった。クイズ形式で子どもたちは大変楽しんで見たが、盛り上がりすぎて騒々しくなったり、動画が淡々と進んでいくなかで子どもたちが質問を言ったりするので、適宜、教諭が調整しながら動画を流したとのことであった。年中・年長児は既に経験としてモルモットに触っているため具体物を想像しながら視られたであろうが、年少児は初めてモルモットを視る子どももおり、頭に入ったかどうかは確かではないと考えられる。教諭Bは、この動画視聴については、子どもたちが楽しみにしているので有難かったと述べていた一方で、画像で見ることができても直接、触れ合えないことの大きさを感じたという。実物がやってきた際には実際に触れるのはもとより、時に動物が排泄をすることもあり、それも含めて生物の実際の姿を子どもが間近に見られるのが有難いと感じると言う。教諭Bは経験年数も7年と長く中堅的な位置にあるので、6、

7月の動画視聴によるものだけではなく動物介在教育全体についての意見も問うたところ、以下のような見解が得られた。動物介在教育は月に一回の「ちょっとしたイベント」として子どもたちが楽しみにしている様子であるという。東京都渋谷区という立地条件の特性からも自宅で動物を飼っていない子どもが多く、そうした子どもたちに命について知る良い機会になっていると感じている。教諭B自身も幼少期に家庭で動物を飼育したことがなく、また同様の同僚も多いため、子どもとともに我々教諭も動物に触れる機会となっている。子どもたちのなかには「触りたいけれどもちょっと怖い」といった子どももあり、そうした子どもに教諭が寄り添って子どもとともに動物に触れることで子どもの恐怖心が薄れ触ることができるようになっていくことは素晴らしいと思う。また、動物介在教育で連れてこられる動物には名前がついており、名前を知り名前と呼ぶことによって動物への親しみや愛着が湧いているようにも見受けられ、複数回くりかえして同じ動物が連れてこられるたびに愛着が増す経験もしているようである。

IV. 考察（まとめ）

2020年度開始当初に前年度（2019年度）介在者であった学生から「一年間、様々な動物を連れてきてその生態を教えてきたことが身につけていない。そこで、今後は動物を三か月間、同じ動物に固定して教えたほうが定着する」という方向の提案があった。この提案に対して本園の全ての教諭が子どもたちに動物の生態のみを理解させることがこの活動の目標ではないこと、動物との触れ合いで動物から発せられる様々な情報や動物に対する正しい態度を学び、これらを子どもと介在者である学生、教諭が共感・共有すること、このようなことが「いのち」を知り、心を育てていくことに繋がり、これが動物介在教育の目標であると捉えている。

教諭たちは、自分たちは幼稚園教育が専門職ではあるが、動物については専門的な知識は皆無に近いため、触れ合いは介在者である学生に任せ、サブに回り、子どもたちの動物への恐怖心を取り除く言葉かけやスキンシップを図るなど、教諭としての援助を行っている。殊に、経験年数の少ない教諭にあっては回数を重ねるこ

とによって動物介在教育に対する意味を考え、動物を好きになろう、楽しもうという意識が変わってきたという。子どもたちと同様に教諭も、動物に慣れ親しむ過程が重要であるといえよう。

その一方で教諭たちの意見のなかには、動物について専門的な知識をもっている学生らであっても、幼児期の子どもの発達段階に適した言葉かけや教材準備などに一定の課題が残されているというものも複数、散見された。日々、子どもに接している教諭が、よき支援者として動物介在教育の実践に関与することによって、子どもにとっては勿論、帝京科学大学の研究チームにとっても、より効果的な実践が期待できるのではないだろうか。例えば、教諭の意見のなかに「年長組では虫めがねや聴診器を使ってより動物の知識を深めようとする介在教育の時間があつたが、他の学年でも取り入れられるのではと思う。触ること以外の方法がもっと充実されると子ども達にとっても実のある介在教育になるのではと思う」というものがあった（前掲）。『幼稚園教育要領解説書』にもあるように、幼児期の子どもは五感をとおして周囲の環境に接し、多くを学んでいく。触覚のみでなく多様な感覚をとおして環境に接近することの重要性とともに幼児の発達段階の実際の様子にも精通する幼稚園教諭ならではの視点が、このメッセージから読み取れる。こうした貴重な観点を生かすことにより、動物介在教育の更なる充実が期待できるのではないだろうか。

次年度および将来に向けて、幼児期の発達を踏まえて動物介在教育の実践方法と介在者、教諭双方の専門性を生かした連携のもと、年間のプログラム作成が重要と考える。

V. おわりに

本園は昭和28（1953）年創設以来、「よく見る」「よく聞く」「いろいろ体験する」を教育の重点としている。すなわち、幼児一人ひとりが園生活の中で、様々な生活や遊びを通して自己実現を目指す場となるよう保育を実践していくということである。そのために教師は、幼児理解に基づいた計画的な環境を構成し、この環境に幼児が主体的にかかわり、生活や遊びへの意欲をもてるように援助していくことが求められている。

本園は、都心にある幼稚園であり在園児の家庭においても日常生活で動物に触れる機会は極めて少ない。そのため、保護者も本園の動物介在教育への関心と期待は大きい。

平成 29 (2017) 年の幼稚園教育要領の改訂において、その基本方針として①幼稚園教育において育みたい資質・能力の明確化、②小学校との円滑な接続、③現代的な諸課題を踏まえた教育内容の見直し、が挙げられている。この②では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として 10 の姿が示されている。その中の一つ「自然との関わり・生命の尊重」には、「自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探求心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることをもちかかわるようになる」とある。このことは、幼稚園生活において身近な自然と触れ合う体験を積み重ねながら、自然への気づきや動植物に対する親しみを深める中で育まれていくことを示唆している。

本園において実践されている動物介在教育は、目の前の動物を見たり触れたりという直接体験をすることにより、動物へ触れる態度や心揺さぶられる感動体験の姿がみられるようになっている。

本園教諭たちは、幼児たちがこうしたかかわりを積み重ねる中で、動物への愛情や親しみを感じ、単にかわいがるだけではなく命あるものを大切に扱い、いたわりや思いやりの心をもつ子どもに育ってほしいと願っている。そして、教諭たちの動物介在教育への意識は、保育経験を経るごとに幼児たちにとって楽しい動物ふれあい体験となるよう側面から援助する重要性を認識する姿勢へと変容していることが明らかとなった。

今後は、幼児の生活や遊びと発達過程の理解に基づき、日常保育との関連を踏まえて動物介在教育の充実を図っていくことが望まれる。

(文責：Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 2 永井理恵子、Ⅲ 1・Ⅳ・Ⅴ 溝口綾子)

【謝 辞】

本報告の作成にあたり調査研究を快諾して下

さった帝京めぐみ幼稚園長、ご多忙のなか聞き取り調査に応じて下さった同幼稚園教諭の A 先生および B 先生、アンケート調査にご回答くださった同幼稚園教諭の皆様、心より御礼を申し上げます。

【参考文献】

文部科学省『幼稚園教育要領』2017

文部科学省『幼稚園教育要領解説』2017

A Change on kindergarten teachers' understanding for Animal Assisted Education in Kindergarten

Rieko NAGAI • Ayako MIZOGUCHI

Department of Early Childhood Education, Teikyo Junior Collage

【abstract】

【Purpose】 Animal Assisted Education has been doing at Teikyo Megumi Kindergarten for 15 years since 2006 under the leadership of Animal Assisted System Laboratory in Teikyo University of Science. The kindergarten children and their parents are very much interested in this program and also we provide the special experience for children who live in the middle part of the city.

In this program, the main leaders are students of Teikyo University of Science, helping them the kindergarten teachers. We believe however more kindergarten teachers' assistances are very important to get good achievement on this program.

This report, we tried to clarify about modification of teachers' consciousness for Animal Assisted Education through support of the educational activities. This will enable for teachers to work on this special educational program better.

【methods】 We tried to make sure of this kindergarten teachers' understanding for this program by questionnaires and interviews of them.

【Results】 We found as a result it is very important work to help children by kindergarten teachers in this program. Children who are afraid of animals can get courage by the help of kindergarten teachers. Without a doubt, their help is the most important thing to achieve this educational program gradually. However, kindergarten teachers hesitate to give their opinions on this program because they are not the specialists though they know the growth of children and the developmental stage very well. In order to develop this educational program, it is necessary to recommend appropriateness to present animals according to age by teachers who know about children's development.

【Discussion/Conclusion】 Kindergarten teachers who have long career want a time to get talk with the staff of Teikyo University of Science to create program better. However, it is difficult to get the opportunity to discuss about this program with the staff of Animal Assisted System Laboratory. Even if we say so, it is necessary to deepen this program, to build good relationship with them. Kindergarten teachers who spend with children every day and know about children very well can help to evolve this program finally. We expect to make better relationship with the staff of Animal Assisted System Laboratory to get more outcome on this program.

【Key words】 Animal Assisted Education, kindergarten teachers, Kindergarten teaching procedures, expertise